

米軍機が撮影した空襲直後の花巻

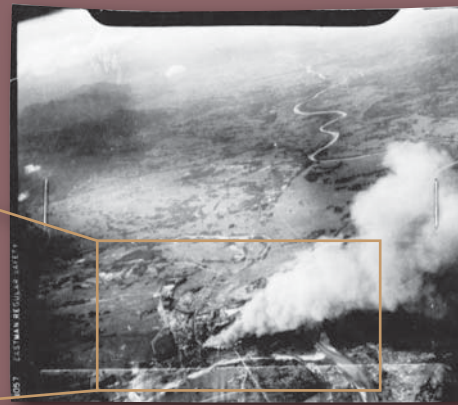
右の写真は、米軍機が花巻上空から撮影したものです。上町付近から煙が立ち上がっており、空襲の初期段階に撮られたものと考えられます。

写真は、米国立公文書館が所蔵する航空機戦闘報告書(全319ページ)をまとめたマイクロフィルムに収蔵されていたものです。花巻空襲のほか、呉(広島)、伊丹(兵庫)、岩手陸軍飛行場(通称・後藤野飛行場)、真室川(山形)、鳴子細倉鉱山(宮城)、四日市(三重)、上田(長野)の写真も収蔵されています。

■航空機戦闘報告書とは

米国海軍空母ハンコックの艦載機である第6飛行隊が実施した、昭和20(1945)年7月24日から同年8月15日までの53回にわたる攻撃の報告書集です。花巻空襲の際の攻撃内容(下記にその一部を記載)も書かれています。

- ▷離陸日 昭和20年(1945)年8月10日 時刻11:30
- ▷任務 日本の北本州、岩手飛行場(※後藤野飛行場)、花巻鉄道ターミナルの攻撃
- ▷帰投時刻 16:20
- ▷地上目的物への攻撃目標 岩手飛行場(※同)、花巻鉄道構内と町、目標滞空時間13:30-14:30



戦後70年 あの惨状 忘れない

昭和20年8月10日、花巻は空襲に見舞われました。まちは大規模的に破壊され、40人を超える尊い命が犠牲になりました。終戦5日前に起きたこの惨禍を、当時の写真や体験者の話から今に伝えます。



「やすらぎの像」
恒久平和を願い、特に空襲の激しかった花巻駅前
に平成7年3月建立

低空を飛ぶ戦闘機に死を覚悟

その日は最高気温30℃を超えるじりじりとした暑い日でした。
午前8時半ごろから、花巻上空に何度も米軍の戦闘機(航空母艦から発進した艦上機)が現れ、まちには警戒警報や空襲警報が繰り返し鳴り響いていました。

南方方向に向かった戦闘機は、岩手陸軍飛行場(現在の北上市和賀町後藤にあつた通称・後藤野飛行場)などを攻撃。空襲を続ける戦闘機や立ち上る煙は遠く花巻からも見え、人々を恐怖に震え上がらせた。

昼ごろになると戦闘機の姿は見えなくなり、多くの人がいつもの生活に戻ろうとしていました。しかし、その矢先の午後1時30分ごろ、「ゴー」という轟音とともに、編隊を組んだいくつもの戦闘機が再

び現れます。
編隊は降下し、建物のすぐ上を飛行。多くの人がその姿に恐れおののき、死を感じたといえます。
そして、そのわずか後、花巻のまちに猛烈な爆音がとどろきました。

惨禍を極めた花巻駅周辺

空襲は、家を焼き、まちを壊滅させ、人々の命を奪いました。
米軍の航空機戦闘報告書によると、襲来した戦闘機は全部で22機。任務は、日本の北本州、後藤野飛行場とともに「花巻鉄道ターミナルの攻撃」とされていました。
22機の戦闘機は、500ポンド爆弾やロケット弾、20ミリ機関砲などにより、花巻駅や上町周辺、さらに宮野目村(当時)の似内駅など各所を攻撃。中でも、花巻駅周辺への攻撃は激しく、多くの人が犠牲になりました。

同報告書では、その攻撃を次のように記述しています。

「花巻では、戦闘機と爆撃機が鉄道の駅、鉄道機関車と列車を攻撃した。1発の爆弾がその地域に落とされたが、結果は観測されなかった。海軍少尉のAニールソンの

爆弾投下は軌道の大きな部分を破壊した。ほかのパイロットたちは全部で15発のロケット弾と0.50インチ(約12.7ミ)口径弾を何回も発射した。機関車2台が燃え、鉄道の駅は煙に包まれた。そして、電気機関車1台がひどい損傷を受けた」

火の海と化した上町周辺

上町周辺は、空襲の規模こそ大きくなかったものの、着弾地点から上がった火の手が瞬く間に広がり、火の海と化していました。
火の勢いは夜になっても衰えず、真っ赤に染まった空は昼間のようには明るかったといえます。
火は、辺り一帯を焼き尽くした翌日、ようやく鎮火。延焼は約7万坪(23万1千平方メートル)に及び、花巻の中心部には灰だけが残りまし



【参考資料】
○『花巻が燃えた日』(加藤昭雄さん著)
○『絵本花巻がもえた日』(文 加藤昭雄さん、絵 遠藤市子さん)